

## 大きなけやきの木の下で 絵本のはなしをしましょうよ。



2023年 5月の終わりごろ こまばようちえん

みなさま、こんにちは！ 幼稚園の庭の木々や草の緑が美しく、生長の喜びに満ちているように感じます。

今年度初めての「絵本ブックトーク：大きなけやきの木の下で 絵本のはなしをしましょうよ」をお届けします。私、理事長の須藤麻江と、「本のへや」担当の近藤千春先生とで、さまざまな絵本を紹介していきます。絵本は小さな人たちだけのものではありません。私たち、大人も、絵本の世界、物語の世界を楽しみましょう。では、大きなけやきの木の下で、絵本のはなしをいたしましょう。



●こんにちは！【本のへや】の近藤千春です♪

新入園児の保護者のみなさま、はじめまして。

元・駒場っ子の次男(現在28歳)が小学3年生の時に仕事復帰し、駒場幼稚園の非常勤教職員として6年間。それから約7年後、【本のへや】の児童文化専科講師として駒場幼稚園へ。

☆子ども・遊ぶこと・絵本を読むこと が好きになり過ぎて、今はいろんな場所でこんな仕事をしています→子育て支援拠点での保育相談スタッフ・保育士・語り手(おはなし会主宰。主に、わらべうたやおはなし遊び、絵本の読みきかせと昔話のストーリーテリング。赤ちゃん親子、小学生、大人対象)・遊びと発達、絵本とおはなし・伝承遊びが専門の研修講師(専門学校とフリーランス)☆

コロナ禍以降に始まった、保育時間にひらく【本のへや】移動図書館。選書はわたしの仕事ながら、当日の楽しい時間はお母さま方のお手伝いなくしては成り立ちません。いつも感謝感謝です。ときに電光石火、ときに迷いまくって1冊の絵本を借りていってくれる子どもたちもほんとうに素敵。たかが1冊の絵本は、されど1冊の絵本…子どもの“今の”「これ

がいい！」をかなえるスペシャルな1冊です。おうちで、親子で、たっぷり楽しんでもらえますように。

こちらのブックトーク便りも、あさえ先生と楽しく配信してまいりますね。

今年度も、どうぞよろしくお願いいたします♡

### ① たんぽぽ組・年少組のみなさんに。



#### ● 『たまちゃんとしっぽ』

カズコG・ストーン・作 童心社 1045円/2020年

子ネコのたまちゃん、なにかを見えています。それは、しっぽ。だれのしっぽかな。みみちゃんのしっぽでした。たまちゃんとみみちゃん、なに、みてる？ ながいしっぽ。さあ、だれのかな。そのながいしっぽのもようが、たまちゃんとみみちゃんの色とおんなじです。さあ、だれのかな？ 「しっぽ しっぽ」の繰り返しが楽しくて、読みながら、ゆったりした気持ちになる絵本です。（須藤）



#### ● 『でんしゃがきました』

三浦太郎・作 童心社 1430円/2017年

電車は ガッタン ふみきり カンカン。駅にやってきます。ネズミさんが待つ「さんかく駅」には、どんな電車が来るかしら。小さいチーズの電車が来ます。うさぎさんの待つ「サラダ駅」には？ ライオンさんが待つ「ジュージュー駅」には？ かっぱさんが待つ「さびぬき駅」には？ どんな電車がくるかしら。想像しながら、お話ししながら、ページをめくっ

ていってくださいね。さいごの「ごはん駅」には、なんと食堂車が連結されていますよ。(須藤)



● 『こぶたのプーちゃん』

本田 いづみ・文 さとう あや・絵 (福音館書店) 990 円/2014 年

ちっちゃなこぶた、プーちゃんはぬかるみが大好き(こぶただけに)。でも、プーちゃんが飛びこんだのは、ぬかるみだけではありませんでした。ほしくさの山に、わたげになったタンポポ畑。そのたびに、どろんこおぼけになったり、もじゃもじゃおぼけやふわふわおぼけになるプーちゃん。それを見た動物たちはこわがって逃げていくのだけれど、さて、プーちゃんママはどうするのでしょうか？ さすが！のたのもしいママに愛されるプーちゃんのうれしそうなおこと。一緒にニコニコしながら楽しく読み合えること、うけあいです。(近藤)



● 『ぼうしころころ つみきのえほん①』

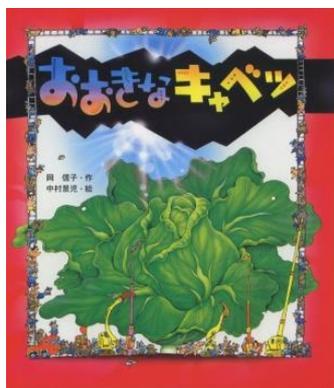
長谷川摂子・文 田宮俊和・構成 相沢康夫・解説とイラスト  
(福音館書店) 1430 円/2008 年※重版未定

めくるめく、見立て遊びの世界へようこそ！(もし、今はピンとこなくても大丈夫です&だから年長さんまでオススメ)

登場人物も背景も、ほぼ積み木だけで表現されていて、主人公は、4人(4こ)の積み木たち…あかくんとあおちゃん、きいくんとみどちゃん。自分たちがかぶっていた帽子(帽子だっ

て積み木)が風に飛ばされて、みんなで探しに行きます。途中でお世話になるおまわりさんもいい味出してる。赤は女の子・青は男の子、という“刷り込み”を感じさせない呼び名もいいなあ。シンプルなオノマトペも心地よく読みやすい文章は、長谷川摂子さん(『めっきらもっきらどーんどん』の作者としても有名)。続編のつみきのえほん②『あかくんとまっかちゃん』も同じくらい楽しい。実は、想像力の基となる「見立て遊び」と併せ、「積み木遊び」も子ども時代には超重要な遊びのひとつです。ちなみに、積み木遊びを考案したのは、幼児教育の父と称されるドイツの教育学者フレーベルだと言われていますが、曰く「積み木遊びを通して宇宙の法則まで直感しうる」←ふ、深すぎます…。自身もおもちゃデザイナーとして活躍されている相沢康夫氏の解説まで興味深いですよ♪(近藤)

## ② 年中・年長組のみなさんに。



### ● 『おおきなキャベツ』

岡信子・文 中村景児・絵 (金の星社)2001年(重版未定)

キャベツ畑にキャベツがずらり。その中の一つがどンドン、大きく大きくなっていきました。面白かったこどもたちが、大きなキャベツに遊びに来ました。キャベツの葉っぱはひんやり冷たくて、柔らかくていい気持ち。ところが、遊んでいたら、キャベツの葉っぱがくるくると丸まって、こどもたちが中に巻きこまれてしまいました。さあ、大変。力自慢のお相撲さんや消防士さん、プロレスラーたちが100人きたけれど、キャベツはかたくとじたまま。さあ、子どもたちは、どうやって助けられたのでしょうか。キャベツ料理を食べたくなるお話です。(須藤)



● 『かたつむりの でんでんちゃん うまれたよ!』

たけがみたえ・作/絵 、須田研司・監修 (童心社) 1.430 円/2021 年

「むしのたまごシリーズ」の1冊。絵が優しくて美しいです。この絵本を読んで、私自身、でんでん虫って、そうか、こういう生き物だったのか、ということを知ることができました。オスとメスの区別がないカタツムリの生態のことも書かれています。雨の日、小さかった息子たちが、公園で探したカタツムリを、おちょこにした傘の上に何匹も乗せて帰ってきた姿を思い出しました。シリーズ最新刊は「だんごむしのだんちゃん うまれたよ」です。(須藤)

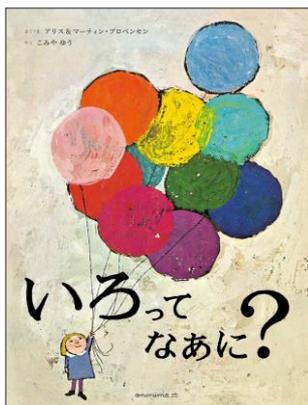


● 『ふわふわくんとアルフレッド』

ドロシー・マリノ・文/絵 石井 桃子・訳 (岩波の子どもの本) 1210 円/1977 年

あまりにも好きすぎて2冊持っている絵本がいくつかあるのですが(変かなあ・笑)、この本もそのひとつ。幼い子どもゴコロを知り尽くしているとしか思えないドロシー・マリノの作品で、石井桃子さんの名訳が冴えわたっています。読むと子どもがとても気に入ってくれることに加えて、おもちゃの存在とその大切さを考えても、とてもありがたい本です。おもちゃのくま・ふわふわくんは、アルフレッドが赤ちゃんの時から仲良し。ところがある日、新しいおもちゃのトラ・しまくんがやってきて、ふたりの間に大きなさざなみが…。

ふわふわくんの、まっすぐで切実なアルフレッドへの思いと、ふたりの(ふたりだけにしかわからない)いさかいと深い交信。子どもが我が事として共感し、自然と感情体験ができる稀有な絵本の1冊だと確信しています(限定復刊の今、3冊目をゲットしようか悩み中)。最後のページがまた秀逸！このふたりと読者だけが共有できる秘密に大満足です。(近藤)



● 『いろってなあに?』

アリス&マーティン・プロベンセン・作 こみや ゆう・訳 (アノニマ・スタジオ /1980円 /2022年)

〈色〉が主人公。おもしろくて知的で、たいへん美しい絵本です。50年以上も前に世に出た作品だなんて、ちょっと驚きませんか？

子どもは2歳ごろから少しずつ、色の名前・概念を自分のものにできるようになります(もちろん個人差があります)。その時期は特に、色がわかることをとても喜び、好きな色に強くこだわることも。この絵本に出てくるのは、黄・紫・青・赤・緑・茶色・オレンジ・白・黒…色をした、いろ〜んなもの。色合いも構図もオシャレでセンス抜群。たとえば黄色のページでは「ライオンとひよこ」の組み合わせ。リズムカルで洗練された言葉に耳を澄ませながら〈目で見ると〉ことをシンプルに楽しめることでしょう。

「いろ.それは、このせかい そのもの」…最後の言葉にノックアウトされました。〈色〉を切り口にして、なんと哲学的な世界観にまで到達しているとは。(近藤)

③ 大人のみなさんに。



● 『植物あそび』

ながたはるみ・著 （福音館書店） 1.760 円/1998 年

「つくってみよう、ためしてみよう」の項目では「種を蒔く」「アクアリウムづくり」「木の葉のアート」など。「草花あそび」の項目では「風車」「人形」「おもちゃ」「虫かご」「変身」など。見出しを見ただけでワクワクしてきます。「草木染め」のページもあります。我が家ではおやつに巨峰を食べた後、その皮でガーゼを染めて遊んだことがあります。植物遊びを気軽に手軽に楽しむヒントがいっぱいの絵本です。（須藤）



● 『ロバのシルベスターとまほうのこいし』

ウィリアム・スタイグ・作 せた ていじ・訳 (評論社) 1430 円/1975 年

小石集めが大好きなロバの子・シルベスターは、ある日、赤くて丸い小石を拾いました。この小石が実は、願いを叶えてくれる魔法の石だったことから、シルベスター(とシルベスターを愛する両親)の身に、たいへんなことが起こります…。

長年届けている小学校でのおはなし会で、特に大切に読み続けている絵本の1冊。どうなっちゃうの？シルベスター！とハラハラドキドキする子どもたち。かといって、けっして小学生向けの絵本というわけではありません(キッパリ)。酸いも甘いも噛み分けた大人が、身をもって体験してきた(体験している)であろう「人生における絶望とよろこび」。そのことが、

絵本というカタチ・物語として表現されているからです。いままで、もう何回読んだのかわからないほどですけど、心を込めて読むたびに、最後は、深い深い満足感と安堵感で胸がいっぱいになります。すべての人の心の中に、この物語がお守りのようにあればいいのに…なんて勝手に思っちゃってるくらい大好きでスペシャルな1冊です。(近藤)



● 『ヘイスタック』

ボニー・ガイサート・文 アーサー・ガイサート・絵 久美 沙織・訳 (BL 出版)※絶版

この絵本で「ヘイスタック」のことを初めて知った時は感激しました。牧場に生える膨大な草を刈って干し固めて作る、巨大で細長い草の山。1年を通して、農場の牛や豚たちの食料・住まい・遊び場になります。うーん！凄すぎませんか？！

めぐりめぐる季節。動物たちの生の営み。自然をうまく利用し、共生してきた人間の知恵ある暮らしとその仕事。効率化され機械化されることで失われてしまうには、あまりにもったいなくて残念だと思うのはわたしだけでしょうか。銅版画による絵は、繊細緻密。かつパノラマ的で、広大な風景を俯瞰できてたいへん見ごたえがあります。あらためて感じるアートのカ。それにしても、最後の一文…「そうしてまた、新しい春がきて、すべてがゆっくりとめぐりはじめるんだ。もういちど、はじめから」に、すっかり惚れ込んでいるわたしです。(近藤)

• 絵本はざっくりと次のように対象年齢にそって紹介していきます。ただ対象年齢はあくまで目安です。お子さんが興味を示した絵本、お子さんに読んであげたいと思った絵本を見つけたら、手にとってみてください。

① たんぽぽ組・年少組のみなさんに ② 年中・年長組のみなさんに ③ 大人のみなさんに

• 「重版未定」の絵本も積極的に取り上げます。図書館に入っていますし、リクエストが多くなると復刊される可能性もあります。

• 紹介した絵本は重版未定(中古品)も含めて藤井チズ子前理事長からいただいた寄附金で極力購入し、本の部屋に入れます。藤色のテープが目印です。

